

『ルイ・ランベール』の語り手について

奥 田 恭 士

文化環境学大講座

Sur le narrateur de *Louis Lambert*

Yasushi OKUDA

Laboratoire de la corrélation entre l'anthropologie et l'écologie

Faculté des sciences anthropologiques et écologiques

Université préfectorale de Hyogo

Résumé:

Qui est le narrateur de *Louis Lambert* ? Examen de quelques étapes du 《premier narrateur anonyme》: *Pysiologie du mariage*, *Le Lys dans la vallée* et *Louis Lambert*. Quelques remarques à propos de la vraisemblance narrative dans *Adieu*. Rôle du 《premier narrateur anonyme》joué dans *Louis Lambert*.

Mot-clés:

HONORE DE BALZAC, *Louis Lambert*, Le narrateur

『人間喜劇』¹⁾における「語り手」については、これまでも様々な形で取り上げてきた。その際、問題となったのは、執筆の初期段階で「匿名」だった「わたし」が、バルザックによってどのような形で命名されたか、あるいはされなかったかという点である。また、「語り手」(「私」)を扱う場合にレベルの混同をテキスト内に残存させている例をいくつか見ることができた。代表的なものとしては、『赤い宿屋』に関して²⁾、「語り手」の階層の分岐が生じており、登場人物ヘルマンの語り以外の部分で、「わたし」は実際には二層ではなく三層構造を取っていること、作者＝「わたし」に対して、物語レベルで行動する人物＝「わたし」が存在し、それらの間に、作者バルザックとは区別されるべき人物がテキスト内で異相化しており、「書く」という行為をおこなっていると思われるもう一人の「わたし」が認められる点を指摘した。この他にも、バルザックは、一人称を語りの出発点とし、その後「語り手」を作中人物化する過程において、異なったいくつかのタイプの異相を、テキストの中に残存させている。本稿では、一人称に対してバルザックがどのような意識を持っていたかを振り返り、主として『ルイ・ランベール』という自伝的作品において、「作者

であるはずの語り手」(「私」)がどのような形で現出しているかに焦点を当てたい。

Ⅰ 戦略としての一人称代名詞

一人称代名詞に対するバルザックの意識的な位置づけは、『人間喜劇』の起点とも言える『結婚の生理学』に夙に現われている。

例えば、本論冒頭の「第一部 総論 考察Ⅰ 主題」からすでに(Pl.XI, p.911～)、一人称単数の《je》と一人称複数の《nous》を軽妙に使い分けているし、「第二部 内外の防衛手段について」では、とりわけ「考察XVII ベッドの理論」において(Pl.XI, p.1060～)、具体的な場面に読者を引き入れる目的で、会議の記録係としての「語り手」が一人称単数の形で語りはじめ、会議が終わると、《nous》《l'auteur》《vous》を混在させながらも《nous》を基調として論述し、逸話の部分になるとまた一人称単数の《je》を登場させるなど、一見すると人称代名詞が無秩序に混在して出てくるように感じられるが、実際にはバルザックがテキストレベルでの差異化を意識的におこなっていることが、容易に読み取れる。

バルザックが明確に「語り」の立脚点を意識していたと思われる根拠として、「序説」末尾を飾る『味覚の生理学』（ブリア＝サヴァラン）からの引用を挙げておきたい。

「一人称単数で《わたし》と書いたり話したりしたときは、読者との打ちとけた話を前提としていて、読者は調べたり、討論したり、疑ったり、ときには笑ったりもできる。しかし、かの畏れおおい一人称複数の《われわれ》で身を守ったときには、はっきり申し上げておくが、読者はこれに従わなければならない。（ブリア＝サヴァラン、『味覚の生理学』序文）」(Pl.XI, p.912)

バルザックは、『結婚の生理学』を書き起こすに際して、主語人称代名詞の役割区分をブリア＝サヴァランにならい、十分に意識していたことが上記引用から読み取れる。つまり、一人称単数を用いたときと一人称複数を用いたときでは、筆者の立場は大きく異なるということをあらかじめ読者に明言しているのである。

更には、一人称単数の機能的な側面もはっきりと理解していることが以下の記述から分かる。

「事柄はとても重要なので、筆者は一貫してそれを《逸話化する》ように心がけた。というのも、今日、教訓には欠かせないもの、本を退屈さから救う眠気覚しこそ、逸話だからだ。」(Pl.XI, pp.911-912)

この《逸話化する》(anecdoter)という言葉がバルザックのネオロジスムであることはプレイヤード版の校訂者も指摘するところだが、この表現が端的に示すように、『結婚の生理学』において読者を飽きさせない逸話という手段は、《je》という主語人称代名詞を使うことで効果を発揮すること、読者に楽しんでもらうという機能的側面が一人称単数の語りには存在する点をバルザックがはっきりと理解していることが分かる。これは、1826年版を改訂する際、エピソード群を組織的に増幅させるために用いた手法のひとつであったことは言うまでもない。

このように、『人間喜劇』の初期段階から、《je》の機能に対する意識がバルザックにははっきりとあったことが確認できる。『結婚の生理学』に「《わたし》の組織的な隠蔽」を見るピエール・バルベリス、バルザックが「代弁者なしに話している」とするペール・ニクログの見解は、その戦略的側面に十分注意を払うことをうながしていると言えるだろう³⁾。

II 一人称代名詞で語ることの「罨」

今見てきたように、バルザックは《je》による語りが担う機能を十分に意識していたが、一方では、その危険性にも敏感だった。

『谷間の百合』の有名な序文で、バルザックは《je》の語りについて言及し、特に自伝的と取られかねない作品における《je》の使用の危険性を次のように言明している。

「《わたし》で語ることは、書簡体形式と同じくらい深く人間の心を探ることができ、その上書簡体の冗長さを持たない。どの作品もそれに相応しい形式を持っているものだ。小説家の腕前は自らの着想を十分に素材化できるかどうかにかかっているのである。（中略）しかし、《わたし》で語ることは、作者にとって危険がないわけではない。（中略）判断基準が示されているにもかかわらず、多くの人々は今でも、作家が作中人物たちに与える諸々の感情の共犯関係を書き手に求めるという馬鹿げた行為をおこなっているし、彼が《わたし》を使った場合、ほとんどすべての人々が書き手と語り手を同一化しようとしてきた。『谷間の百合』は、多かれ少なかれ作者が真実の物語のもつ紆余曲折を間違いなく進むために《わたし》という語りの形式を取った最も重要な作品のひとつであるから、作者はこの場で明言しておく必要があると考える。すなわち、作者はどこにも登場しない、と。個人的な感情と創作上の感情の混在に関して、作者は厳しい意見といくつかの揺るぎない原則とを持っている。」(Pl.IX, p.915)

バルザックが読者に向かってあらかじめ作者と「語り手」《je》とを切り離すべきだと明言しているのには、この作品に登場するモルソー夫人を実在のベルニー夫人と混同されたくないという理由があった。『谷間の百合』の物語が自伝的と見られることに不都合さを感じたと言い直すことができる。しかし、実際のところ、『谷間の百合』において、バルザックは、作家の立場に立ち、創作上の《je》の問題を真正面から意識的にとらえていたと考えるべきだろう。

なぜなら、バルザックは「わたし」による語りを早い段階で三人称化したからである。『谷間の百合』の草稿には、冒頭の手紙もフェリックス・ド・ヴァンドネスの幼年期の部分もない。作品は舞踏会から始まっており、バルザックは明らかに「わたし」を自分自身として書き出している。ナタリーからの返信は草稿から存在するものの、粗書きがひととおり終わったあとに付加された可能性が高く、その時点でようやく書簡体形式という発想

が浮かび上がったのだと考えられる。そして、間もなく、執筆の初期の段階ですでに「わたし」をフェリックス・ド・ヴァンドネスと命名し、量的に不均衡な一種の書簡体という不自然な小説構成へと変更した⁴⁾。構造上強引とも言える不均衡さを代償に、《je》の問題を解消しようとしているのである。

書き起こし時点で《je》を使用し、その機能的側面を活用することによって、バルザックが意識的に自己投入をおこなっていることは明らかだ。それをある程度おこなったあと、語り手である《je》を自己から分離し相対化していくという執筆のプロセスを意識的にたどったと言い換えることができる。このプロセスそのものに、『人間喜劇』における《je》という「語り手」の問題が反映しているのである。

III ルイ・ランベールと「わたし」

それでは、バルザックはどのような形で《je》を規定していくのだろうか。『谷間の百合』よりも一層自伝的とみなされる作品がある。ロバンジュールに残っている草稿にはじまり、1833年1月に『ルイ・ランベールの精神史』と題してゴスランから出版され、その後修正を重ねて現行の形となった『ルイ・ランベール』である。

一般に、ルイ・ランベールという人物は、多分に作者を反映しており、この作品が自伝的色彩を色濃く持つことはよく知られている。何よりもまず、ルイ・ランベール＝作者バルザックという側面は無視できないと言っている。しかし、一方で、作品において、ピュタゴラス（ルイ・ランベール）と対置される「詩人」が《je》で語るため、この「語り手」（「私」）は作者なのか、登場人物なのか判別しがたい主体の二重性という現象が生じていることも確かである。

作品は「ルイ・ランベールは1797年ヴァンドモワ州の小さな町モントワールで生まれた（略）」（*Pl. XI, p. 589*）という一節からはじまる。冒頭ルイの経歴を語る部分については、まだ《je》という主語人称代名詞は出てこない。《je》が作中人物として登場し、ルイの経歴に直接関わってくるのはテキストの上ではまだ先の話だ。初めの部分では《je》が作中人物であるということは明示されないため、作品は誰か特定の人物によって「語られている」というよりも、むしろ作者がルイという人物について「書いている」という印象を読者は受けるだろう。

ここで、最初に出てくる人称代名詞が、《je》ではなく《nous》である点には注意が必要だ。バルザックは《je》ではなく、《nous》を使うことによって、ルイに関する一般論を抽出している。「しかし、往々にして人

間事象の表層にしか目を向けないわれわれにとって（略）」、「偉大な人物たちの生涯において多くの例がわれわれの目の前に提示されているこれら有為転変は（略）」という記述（*Pl. XI, p. 590*）に見られるのは、『結婚の生理学』で用いられた《nous》に他ならない。《nous》が《je》に先き立って出てくることには、統括的な視点としての作者がまずテキスト内に存在したという意味を持っている。

ルイがスタール夫人の庇護を受け、ヴァンドームのリセでの精神生活に言及されると、ようやく《m'》《je》が出てくる（*Pl. XI, p. 590*）。ルイが読書の喜びを自分に語ったという記述の部分だが、この時点ではじめて、それまでルイ・ランベールの物語を語っていたのは「わたし」であり、まだ命名されていないにもかかわらず、作品レベルで、ルイと関わりをもつ人物であることが了解される。語り手である「わたし」は、ルイと同じ学院にいたのだと、読者は推測しはじめるからだ。しかし、この段階においてもまだ、《je》が作品内部の具体的な登場人物になると予想することはむずかしい。

学院の詳細がルイとの関わりにもとづきながら語られたあと、ようやく、先に学院にいた「わたし」が同級生とともに、「新入生」ルイの登場を待ち受けるという状況であることが判明する。この時点で「わたし」は、ルイを学院入学から直接見ていく作品内部の具体的な登場人物として規定されることとなる。また、学院生活において、「わたし」は、ピュタゴラス（ルイ・ランベール）と対置される「詩人」という渾名によって（*Pl. XI, p. 604; p. 606*）、テキスト内部を動く「行為者」という位置づけを持つのである。そして、この段階で、《je》は作者ではなくなり、匿名の登場人物として作中に「解放」されていく。

「わたし」は、学院生活において、ルイ・ランベールと最も親密な関係にあり、余人の許さない彼の精神生活の深部にまで分け入りながら、この不遇な少年を一貫して見つづけるという役割を果たす。しかし、ここから先の「わたし」は複雑だ。

IV 作者であるはずの「わたし」

問題なのは「6ヶ月後、わたしは学院を去った」という記述からである（*Pl. XI, p. 624*）。学院を去ったのは「わたし」が先だから、その後のルイの学院生活は作品内部にいる「わたし」には直接知り得ないはずだ。そこで、バルザックは、ルイが学院時代に書き、オーグー神父に取り上げられた幻の著作『意志論』について「そのためわたしはランベールが自らの著作に再度取りかかっ

たかどうか知らないのだが(略)」と書いている。しかし、一方でそのあとすぐ次のように断わりなく書きつけている点には留意する必要があるだろう。なぜなら、「わたし」に関する規定が明確化し、「語り手」は作中の人物からいつのまにか作者自身の立場へと戻っていくからである。

「これらの研究の最初を飾る作品のなかで、わたしは、ある架空の著作に対して、実際にはランベールが発案したタイトルを使った。それに、わたしは、彼にとって大切な女性の名前を、献身に満ちたある若い女性につけた。それは、ルイの著作に到来した破局の思い出からであった。」(Pl.XI.,pp.624-625)

「これらの研究」とは、『ルイ・ランベール』を含めた『哲学的研究』の諸作品に当たり、「ランベールが発案したタイトル」とは『意志論』を示している。したがって、上記引用における《je》は『人間喜劇』の作者バルザックに他ならない。

更には、「これらの研究の最初を飾る作品」とは、紛れもなく『あら皮』を指している。『意志論』に加えて、ルイ・ランベールの恋人であった女性の名前をその作品で使ったとしているからだ。具体的には明示されていないが、ポーリーヌ・ド・ヴィルノワに対するポーリーヌ＝ゴードン・ド・ヴィシュノーその人である。

これらの記述は執筆のどの段階から存在したのだろうか。ヴァリエーションを見ると、「これらの研究」に類似の記述が、初版であるゴスラン版以前からすでに存在していたことが分かる。ゴスラン版以前においては「これらの作品群のシリーズ」《la série de ces contes》、ゴスラン版では「これらの作品群のさまざまなシリーズ」《les différentes séries de ces contes》、そして、ゴスラン版訂正後は現行に至るまで「これらの研究」《ces Etudes》となっている(Pl.XI,p.1547)。このことから、すでに執筆当初から変わらず、バルザック自身意識的に《je》が作者であると規定していると判断することができる。

更には、ポーリーヌの名前を作品で使ったとする記述については、ゴスラン版までは存在せず、それ以降の加筆である点を指摘しておく必要がある。なぜなら、作品群の先頭をなす作品が『あら皮』に他ならないことを明確化する意図が、この加筆から読み取れるからだ。バルザックは、《je》を自分自身であると一層明確に規定し直したと言い換えることができるだろう。

執筆の早い段階から、《je》は『人間喜劇』の作者、つまりバルザック自身であると書き込まれ、更には、そ

れを明確化する加筆が加えられているという現象は、『人間喜劇』において類を見ないおそらく唯一の例だと考えられる。《je》が当初匿名でその後も人物再出法の適用を受けなかった事例は他にも少なからず認められるが、『ルイ・ランベール』における「わたし」のほかは、その性格を明らかにしないまま『人間喜劇』中に残っているにすぎない。それに対して、この作品においては、「わたし」の規定が当初からはっきりとしている。

しかし、一方、『ルイ・ランベール』における《je》が文字どおり作者であると、単純にかたづけることができないのも確かである。なぜなら、すでに見てきたように、《je》は作品の語り起こしをおこなう主体であると同時に、作品の時間と空間を生き、ルイと深い関わりをもつ登場人物の一人として存在しているからだ。『谷間の百合』において、あれほど《je》で語ることの危険性に敏感だったバルザックが、この作品では、初期の段階から、自分自身と作中のルイ・ランベールとを、同じ語りのレベルで作品内部に混在させているのは奇妙な現象と言える。しかも、ルイ・ランベールの物語は、作中を動く「行為者」としての《je》には語り得ない部分を少なからず持っており、語りの真実性に関して、他の作品にも見られた言わば「境界侵犯」が認められるのである。

このように分岐した《je》の異相を前に、作者はある方法を使うことによって、その矛盾を解消しようとした。物語という進行する「現実」において、実際には《je》が知りえないはずの部分に「語り」のアリバイを設定しているという点を見ておこう。

ルイの人生における「第三段階」《La troisième phase》について(Pl.XI,p.644～)、「語り手」(「私」)は、ルイとの別離を理由に「当然ながら知るよしもない」とした上で、ルイの伯父の存在をテキスト上に提示し、「叔父が覚えていたただ一つの出来事」と「この時期にルイ・ランベールが叔父に書いた手紙の中で唯一残っていたもの」という記述を通して、「叔父」という人物を介在者に仕立て上げている。作者バルザックであると同時に、作中の「行為者」でもある「語り手」(「私」)は、後年この叔父から「聞いた」話とすることによって、「語り」に保証を与えているのだ。また、ルイと関わり、《je》に情報を与えたもうひとりの重要な人物として、ポーリーヌを後半の場面に登場させることも忘れてはいない。

このように、ルイの叔父とポーリーヌというアリバイを設定することによって、作者である「わたし」しか知りえないはずの部分が、作中人物としての「わたし」にとっても整合性をもつようになる。

バルザック的テキストには、同じように《je》の異相

化を回避しようとする試みがいくつか見い出されるが、『ルイ・ランベール』における「語り手」と《je》との問題を補足する意味で、最後に『アデュー』という中編作品に触れておきたい。

V 「語り」のアリバイ

『アデュー』において、まず問題となるのは、ファンジャ氏が語る物語の前置きとして書かれた次のような部分である。作品の主要な流れだった三人称の語りは、ここで、突然作者の介入を起こしている。

「それから、絶えず浮かびあがってくる苦悩に取り憑かれ、孤独の中で暮らしている人と同じように、彼は長々と次のような出来事を法律家に話して聞かせた。その話を、語り手と判事がやりとりしたたくさんの脱線から時間的な順序に沿って整理し直したのが、次の物語である。」(Pl.X,p.985)

作者を思わせるこの突然の介入に関して、プレイヤード版の校訂者モイズ・ル・ヤウアंकは、註で、バルザックがファンジャの語りとしては不自然だと感じたことを理由として挙げている(Pl.X,p.1772;p.985-n.2.)。ここで、ファンジャの立たされる「語り手」としての位置づけが問題となる。

まず何よりも重要な点は、この物語は、もともとステファニーを救出し、語られる場面に直接立ち会ったフルリオによるものだという点である。ファンジャは親衛隊擲弾兵の口を通して物語を知ることになった。本来フルリオ自身が語るべき話であるが、テキスト上、フルリオはすでに死亡しているため、ファンジャが「語り直す」という設定が取られている。そのため、「語り」の保証はこの時点で確かなものではなくなった。ファンジャは絶えず「フルリオが語ったように」という留保をつけて読者に物語を伝える他ないからだ。ファンジャは、作品において一旦語り手の役割を担おうとしながら、先ほどの引用で見たように、すぐさま突然の介入者によって語り手から降ろされてしまうのである。言い換えるならば、ファンジャには語り手としての主体的な位置づけがなされておらず、実際にはあくまで聞き手にすぎない。ファンジャが介在することで、物語はフルリオ、ファンジャ、更には物語内物語の直前で介入する語り手という三重構造を取っていることが分かる。

このようなファンジャの語り手としての危うさは、この人物の名前の現われ方からも読み取ることができる。ステファニーの物語を話す語り手が「ファンジャ」

《Fanjat》であることは、最初から自明というわけではないからだ。語り手の名前は、象嵌された物語の前では「見知らぬ人」《l'inconnu》、物語の後では「医師」《le medecin》、「老医師」《le vieux médecin》あるいは「ステファニーの叔父」《L'oncle de Stéphanie》とだけ書かれ、「ファンジャ」という固有の名前は与えられていないのである。

ファンジャの名前が初めて出てくるのは、核心の物語(Pl.X,pp.985-1001)のあとだいたってからに他ならない(Pl.X,p.1004)。「ステファニーの叔父」とちょうど入れ替わるように、「ファンジャ」という固有名詞がこの人物を規定するしるしとして作品末尾まで使われていく。核心の物語を語る「語り手」としてのファンジャ氏の立場を示す一例である。

このような『アデュー』における「語り」のアリバイという問題は、本稿で主として取り上げた『ルイ・ランベール』の「語り手」(「私」と無縁ではない。例えば、これは、『サラジヌ』において、物語内物語の最終場面がすでに死亡しているサラジヌしか知りえない内容であり、「語り手」(「私」)は語るができないはずだという矛盾に見られるように、語りの真実性という問題と深い関連がある。また、サラジヌの物語を語る《je》には名前が与えられず、最終的に人物再出法の適用も受けていないという観点から、作者であるはずの「わたし」と、作中人物としては位置づけられるに至らなかった「名前のないわたし」との間に、一種の「ずれ」が存在するという意味で、人物再出法の問題と密接な関係がある。この点において、『ルイ・ランベール』に現出した作者であるはずの「わたし」は、バルザック的テキストに見い出される新たな《je》の異相のひとつであると言えることができるだろう。

註

- 1) 作品からの引用および注釈・資料については、以下に拠る。
La Comédie humaine, I-XII, nouvelle édition, Gallimard, bibliothèque de la pléiade. 註を簡略化する目的で、いずれもPl.と略記したあと、その巻数とページ数を本文中に併記し、訳出のみを掲げた。
- 2) わたしとは誰か—『赤い宿屋』における語りの構造—, 姫路工業大学環境人間学部研究報告第2号, 2000, pp.301-311.
- 3) Pl.XI,p.1774-1775.
- 4) *Le Lys dans la vallée*, éd. Classiques Garnier, pp.434-435, p.520; Claude Lachet, *Thématique et Technique du Lys dans la Vallée de Balzac*, Nouvelle éditions Deresse, 1978, p.48.

(平成19年9月28日)